THISISASWEATER.
°もこーなーみたいな

MADEBY
YONETOMISENI
CO.,LTD.
1136YAMANOBE
YAMAGATA/JAPAN

Yonetomi

Made in Japan, Made by Yonetomi.

A2: A SWEATER IS LOVE.

セーターは愛。

Baile an Mhúir
Inis Meáin
13th March 2001.

My Dear good friend.

I am sending you your sweater. I hope it will fit you perfect. I hope you will like the Patterns. I also hope that you will well wear it and many better.

We engoyed your visit to our home here. you were realy a gentle man.

I hope you will come back again some day with the help of God. We Love the People from your Country very muchmuch.

Thank you very much for the money you gave me.

Our Love & Best wishes to yourself & your family.

From Mairin Ní Dhomhnaill.

「あなたのセーターを送ります。サイズがぴったりだといいのですが。柄も気に入ってもらえればうれしいです。このセーターをたくさん着て、そして他のもっとよいセーターもたくさん着てくれればと願っています。」とつづられているモーリンからの直筆の手紙。

自宅でアランセーターを編む、モーリン・ニ・ドゥンネル

モーリンに捧ぐ

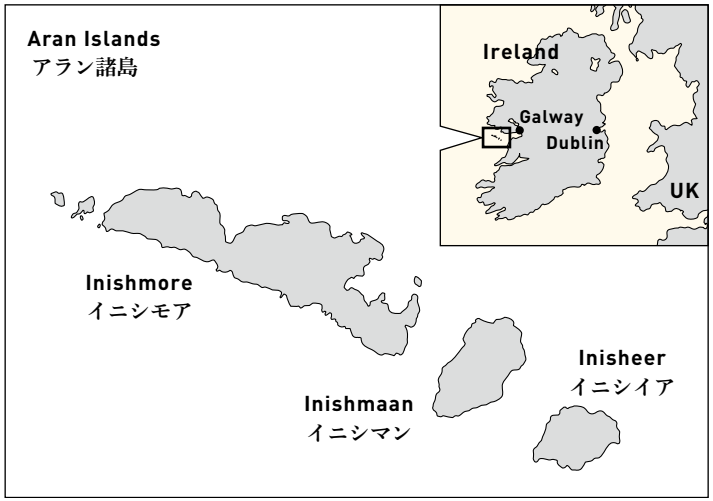
野沢弥一郎

この話の主人公は、モーリン・ニ・ドゥンネル（Máirín Thomáis Ní Dhomhnaill／１９３４－２０２０）というアイルランドの女性です。彼女ほどその一生がアランセーターと深く関わった女性はいないでしょう。ですが、モーリンにスポットを当てる前に、まずアランセーターの誕生から普及について、その歴史をざっとおさらいしていきましょう。

アランセーターの伝説

ケルトの国アイルランドは、イギリスの西に位置する、北海道ぐらいの大きさの島です。アランセーターが生まれたのは、そのアイルランド西岸ゴルウェイ湾の沖合に浮かぶ3つの小さな島々で、総称してアラン諸島と呼びます。西から、イニシモア、イニシマン、イニシイア。イニシはゲール語（ケルト語）で島を意味し、イニシモアは「大きい島」、イニシマンは「真ん中の島」、イニシイアは「東の島」といういたってシンプルな名付けがされています。面積は3つ合わせても伊豆諸島の三宅島ぐらい、人口は3島で約１３００人。大西洋の風が打ちつけ、草木もろくに生えない岩だらけの小さな島。大した作物も取れず、小舟で漁に出るのも命懸けの過酷な生活。こんなところになぜ人が住み続けているのだろう、とさえ思えるような厳しい環境の島です。

というと、まるで一切の来訪者を拒むような絶海の孤島の様な印象を受けることと思います。



アラン諸島の真ん中にあるイニシマンが、モーリンが生まれ育った島。

ところが現在のアラン諸島は、アイルランドを代表する一大観光地なのです。本土からそれほど離れているわけでもなく、天気さえ良ければ首都ダブリンからの弾丸日帰りツアーも組めます。適度な不便さは「手頃な秘境」として人気が高く、夏のイニシモアは景勝ダン・アンガスの断崖絶壁を訪れる観光客でごった返しています。イニシマンやイニシイアにもサマースクールの学生たちが集まってきて、夏場の観光はアラン諸島での最大の産業となっています。

アラン諸島が土着のケルトの風習が色濃く残る異郷の地として知られるようになった契機はジョン・ミリントン・シングの「アラン島 Aran Islands」（１９０７年）でした。シングは１８９８年から４年間たびたびイニシマンに滞在して、その風土や生活習慣を紀行随筆として著したのです。このシングの随筆が雑誌「ナショナル・ジオグラフィック」で数々の写真の大特集となり、これはさらに映画「アラン（原題 Man of Aran)」で１９３４年に映像化されることになります。アイルランドの西岸には小さな島々が数々あるにも関わらず、アラン諸島だけが飛び抜けて知名度が高いのは、このようにアラン諸島がブランド力のある特別な島々であったからなのです。

アランセーターというと、いつも語られるストーリーがあります。

「6世紀の昔からアラン諸島で編み続けられているアランセーター。白いウールで編まれたその独特の編み柄には、漁に出る夫の無事と豊漁を願う女たちの祈りの意味が込められている。その組み合わせは、家々の編み手によってあたかも家紋のごとく異なり、それは母から娘へと伝承されている。万一、不幸にも漁での溺死者が岸に打ち上げられたときには、着ているセーターの柄でその身元を判断したといわれる。」

荒海に漕ぎ出す男たち、それを優しく包む女たちの愛。このストーリーは、アランセーターが世界に普及するにつれ、皆に知られるようになり、いつしか伝説とまで言われるようになっています。

私は、アランセーターを40年にわたって世界に紹介し続けたアイルランドの元弁護士である

パドレイグ・オショコン（Pádraig Ó Síocháin）と１９８７年に出会って以来、アランセーターの魅力にぞっこんとなり、彼の日本側のパートナーとしてこれを日本で販売する仕事を続ける傍らで、この伝説を解き明かす本も書くことになったのです。（「アイルランド／アランセーターの伝説」繊研新聞社２００２年）

今から１２０年ほど前、時は20世紀を迎えたばかりの頃の話です。

アラン諸島・イニシモアには殖産興業のための漁業基地が造られ、そこにはスコットランドからやって来た漁師たちの家族が多く出入りしていました。当時の海の男のセーターといえばガンジーセーターです。紺色の編み地で肩や胸に裏編みの縄目模様が入ったセーターで、その名の通り英仏海峡のガンジー島で19世紀に発祥したものですが、徐々に英国の漁師たちの間で広まり、英国やアイルランド沿岸部の各地に普及していました。他の港町と同様にアラン諸島にもそのガンジーセーターが伝えられたのでした。もともと手先が大変器用だった島の女性たちでしたから、このセーター編みはすぐに島中に広まっていったのです。

そこへ一人の女性がこの島に帰ってきます。マーガレット・ディレイン。彼女の存在がアランセーターの最初の芽を出させます。イニシモア出身の彼女は一度アメリカのボストンに女中奉公に出され、３年ほどして再び戻ってきた女性でした。彼女は類いまれなる想像力と技術を持った手編みの天才だったのです。ボストンで数々のハンドニットに触れ、いつしかセーターの柄を見ただけで、まるで筆で描くように、編み針でそれを再現できたのです。彼女が先生役となり、島の女たちの間では競うように様々な柄が編み出されました。また、もともとこの島には独特の派手好みなところがあったことも手伝って、出来上がるセーターは徐々に編み柄のはっきりとした豪華なものになっていったのでした。こうしてアランセーターの原型が現れました。１９２０年前後のことです。

しかしそれでも漁師たちが着ていたのは白ではなく紺色のセーターでした。そりゃそうです、白ではすぐに汚れてしまいとても漁になど着ていくことはできません。でも現在ではアラ

ンセーターといえば白です。白は一体どこからやってきたのでしょうか。実は白いアランセーターは本来は少年の晴れ着だったのです。

アラン諸島には「男の子は悪魔にさらわれる」という古い言い伝えがあり、男児も女児と同じワンピースのような赤い服が着せられました。そして12歳になってようやく男の格好ができる、その時の儀式が教会の堅信礼（けんしんれい）（コンファメーション）で、いわば日本の元服式に当たるようなものだったのでしょう。ちょうど島の女たちが編み物に夢中になっていたこのころのこと、この堅信礼にあたり、母親はわが息子のために精一杯豪華な白いセーターを編んでやったのでした。

貧しい島でなんと贅沢な、とお思いでしょうか。そうではないのです、成長の早い男子ですから、その白いセーターはやがては解かれて紺色に染められ、再び大人のためのフィッシャーマンセーターに編み直されていったのです。手編みセーターはリサイクルウェアであったわけです。

1910年にイニシモアで撮影された写真。当時の漁師が来ていたのは普及し始めた小さなジグザグとケーブルのガンジーセーター。（National Museum of Ireland 提供）

上：男児は妖精にさらわれないよう女児の格好をさせられていた。／下：ある家族のコンファメーションの記念写真。左から2番目の男の子が着ているのはアランセーター。

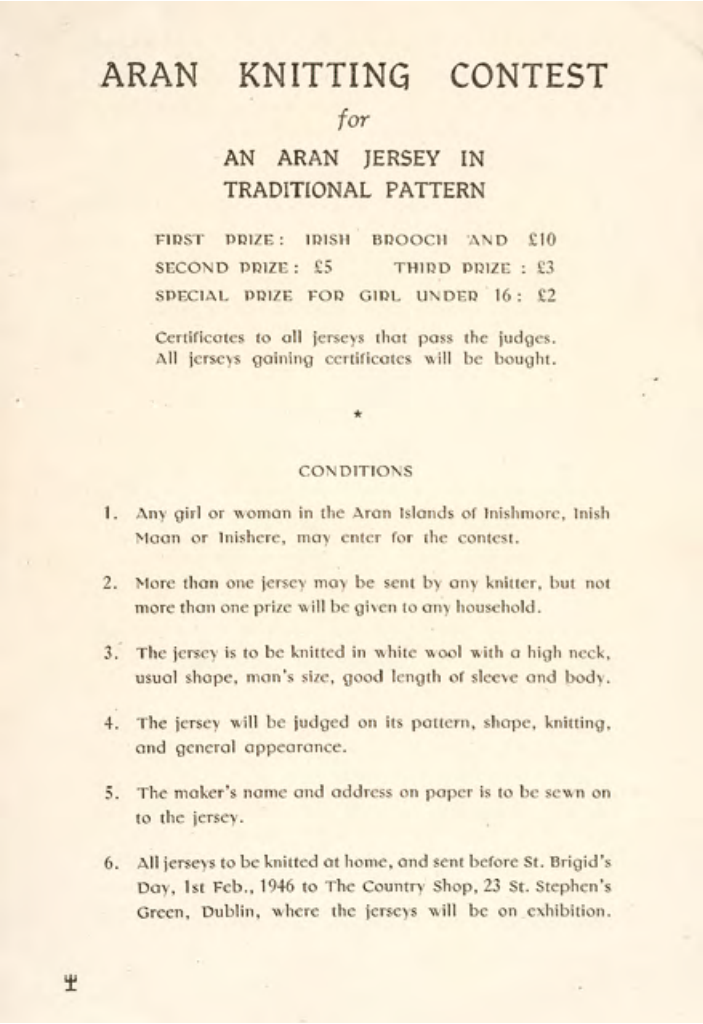
かくして、アランセーターは白という色を得ました。歴史に「もしも」はないとは言いますが、もしもアランセーターが白くなかったらこんなに世界に普及しなかったでしょう。それほどに白という色は強烈なインパクトがあったのです。

子供用の白いセーターを大人サイズに編む、このまさにコロンブスの卵的なアイデアを与えたのがミュレイル・ゲインという女性です。彼女はアイルランドの各地に伝わる女性のクラフトワークを支援し続けた女性活動家で、それらのクラフトワークの数々はダブリンで彼女が主宰するカントリーショップに集められて販売されました。アランセーターは１９３５年から販売が始められています。ゲイン女史こそアランセーターの持つ芸術的価値を初めて認識した人物で、アランセーター普及の最初の立役者と言えます。

終戦直後の１９４６年、ゲインの声掛かりで「アランセーター・コンペティション（競技会）」が開催されます。アランの３つの島に呼び掛けられエントリーは50枚を超えました。賞金の掛かったコンテストですから、編み手たちは持てるスキルを惜しみなく注ぎ込み、それはそれは素晴らしいセーターが集まりました。第１位は当然ながらマーガレット・ディレイン。

その時の優秀作品10数枚はその後カントリーショップからアイルランド国立博物館に寄贈され保管されました。どの作品も商業化していく以前の、アランセーターが最も技巧に優れていた時代の勢いが感じられる傑作です。

次の立役者が我が師パドレイグ・オショコンです。彼がいなければアランセーターが世界に普及することはなかったでしょう。１９５１年に設立されたばかりのアイルランド政府輸出庁の支援を受けた彼はアラン諸島へ乗り込み、アランセーターの産業化に取り組みます。編み手を組織化し、デザインやサイズを（適度に）標準化させ、糸や道具を一括調達し、アランセーターを売れる商品として作り上げていきました。パドレイグの功績は、このアランセーターの産業化を他ならぬ発祥の地アラン諸島でやってのけたことにあります。かつて世界中のあちこちに様々な手編みのセーターが生まれましたが、１００年以上経っても発祥の地において手編みで編み続けられているセーターなどアランセーターをおいて他にはありません。これは奇跡と言ってもいいほどです。



ARAN KNITTING CONTEST

for

AN ARAN JERSEY IN TRADITIONAL PATTERN

FIRST PRIZE: IRISH BROOCH AND £10
SECOND PRIZE: £5 THIRD PRIZE: £3
SPECIAL PRIZE FOR GIRL UNDER 16: £2

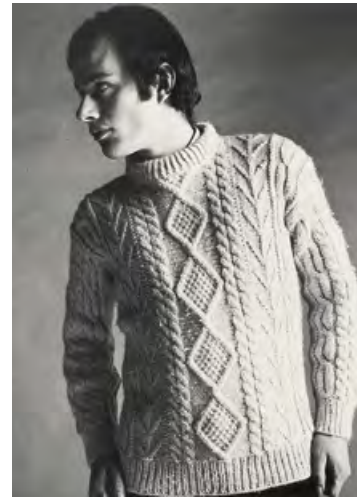
Certificates to all jerseys that pass the judges. All jerseys gaining certificates will be bought.

*

CONDITIONS

1. Any girl or woman in the Aran Islands of Inishmore, Inish Maan or Inishere, may enter for the contest.
2. More than one jersey may be sent by any knitter, but not more than one prize will be given to any household.
3. The jersey is to be knitted in white wool with a high neck, usual shape, man's size, good length of sleeve and body.
4. The jersey will be judged on its pattern, shape, knitting, and general appearance.
5. The maker's name and address on paper is to be sewn on to the jersey.
6. All jerseys to be knitted at home, and sent before St. Brigid's Day, 1st Feb., 1946 to The Country Shop, 23 St. Stephen's Green, Dublin, where the jerseys will be on exhibition.

ミュレイル・ゲイン主宰のアランセーターコンペティションの募集チラシ。条件は「伝統的な柄のアランセーター、白いウールを使うこと、首はハイネック、シェイプ（体型）は一般的な形でメンズサイズ」。



アランセーター普及の立役者パドレイグ・オショコン氏。アラン諸島の最寄り港町の名を冠した「ゴルウェイベイプロダクト」を経営し、アランセーターを「売れる商品」まで昇華させた。そのタグには、伝統的手法にのっとった本物であることが英語とゲール語で印刷され、直筆で編み手のサイン・出身島・サイズ・重さが記された。

彼はまた精力的に世界にアランセーターを紹介しました。まず１９５６年にはクリスチャン・ディオールがそのコレクションにアランセーターを取り上げ、クラフトではなくファッションアイテムとしての評価を高めていきます。そして60年代、いよいよアメリカへ。１９６１年、ＪＦＫことケネディが第35代米大統領に就任します。アイルランド移民の子孫がアメリカの頂点に立ったことで米国全土にアイリッシュの風が流れ出します。ケネディと時を同じくして抜群の人気を博していくのが、アイルランド出身の４人兄弟が結成したフォーク・グループ、クランシーブラザース（クランシーズ）でした。彼らの揃いのトレードマークが白いアランセーターだったのです。当時の人気番組「エド・サリバン・ショー」へはわずか16分の出演でしたが、揃いのアランセーターのインパクトは大きく、その後一気に米国全土へ広まっていったのです。

日本でアランセーターが大ヒットするのがアメリカから少し遅れ１９６９年から71年にかけてです。当時はフィッシャーマンセーターと呼んでいて、英国か北欧のセーターだと思われて

いました。発祥はともかくとにかくアメリカで流行っていれば当時の日本では売れたのです。アイルランドの伝統的セーターだということが認知されたのはパドレイグ・オショコンが70年代初めに来日して以降のことです。以来、彼の来日は１９９５年に90歳でなくなるまでに50回を超え、多いときは年間１０００枚を超えるアランセーターがアラン諸島から我が国に運ばれたのです。それは伝説の波及とともに。

ここで、いつも言われる、例の「溺死者の身元確認」の話について触れておきましょう。実はこれには元ネタがあったのでした。シングが紀行随筆「アラン島」と同時期に書いた一幕ものの戯曲「海に騎りゆく者たちRiders to the sea」（１９０４年）がそれです。ここで遭難者の遺留品として届いた手編みのソックスを手にした家族が、自分の編んだものと判断する印象的なクライマックスのシーンがあります。ちょっと気の利いた演出家なら、ソックスを白いセーターに置き換えることなど難のないことだったでしょう。ある島の編み手は私にいとも簡単に答えてくれました。「自分の編んだセーターはすぐに分かるわよ。絶対間違えっこないわ。日本に送ったものだろうが、溺れた人が着ていようが…」しかしこれらの伝説は実に良くできたセールストークでした。いまだに信じている人が多いのがその何よりの証拠でしょう。

時は流れて２００８年、アイルランド国立博物館カントリーライフ館（メイヨー県キャスルバー）である展覧会が開かれました。「Romantic stitches」と題されたこの展覧会は世界で初めてアランセーターを特集した展覧会でした。ここでは１９４６年の「アランセーター・コンペティション」での優秀作品10数枚が一堂に公開展示されたほか、パドレイグ・オショコンの数々の功績も讃えられたのでした。私のこともちょっとだけですが紹介されていました。

同じく２００８年に、アイルランド放送協会のゲール語テレビ局ＴＧ４は30分の人物ドキュメンタリーを放映しました。そのタイトルは「Máirín Thomáis」、モーリンの結婚前の名前です。いよいよ主人公の登場です。

モーリンの一生

モーリン・ニ・ドゥンネルは、１９３４年にアラン諸島の真ん中の島イニシマンで生まれました。ちょうどミュレイル・ゲインがアラン諸島で白いアランセーターを収集していた頃にモーリンは生まれたのです。母親の見様見真似で6歳の頃から編み物を始めます。当時の島は本当に貧しくて、編み棒すら買えず、ニワトリの羽根を使ってヘアバンドなどの小さなものを編んでいました。自転車のスポークで編んだこともありました。

基本の編み方を少し教わりかけた9歳のときに母親が亡くなりました。２つ上の兄はまもなく12歳、コンファメーション（堅信礼）の教会儀式に臨む歳です。このときはどの家の母親も息子のために白いアランセーターを編んで着せ、その晴れ姿を祝います。「兄に恥ずかしい思いをさせたくはなかったの」。モーリンは母親の代わりに最初のセーターを兄の大切な儀式のために編み始めました。誰も教えてはくれません。「考えては編み、またほどき、そして編

若き日のモーリン・ニ・ドゥンネル。

み直す、その繰り返しだったわ」。わずか10歳の少女のけなげな姿が目に浮かびます。まさにちょうどその頃「アランセーター・コンペティション」の作品募集が島中に呼びかけられたときでしたが、モーリンはまだ若すぎて、技術も拙く、とても応募などできませんでした。後年、このコンペティションに自分が間に合わなかったことを随分悔しがっていたのを思い出します。

さらに16歳で今度は父親を失います。兄とふたりきりの貧しい暮らし、編み物だけが唯一の楽しみでした。そして、１９５７年、22歳のとき、運命の出会い、パドレイグ・オショコンがイニシマンにやってきます。二人の女性を伴っていました。ひとりはダブリン在住の編み物の先生。もうひとりはその直前に隣のイニシイアで確保した約30人の編み手の中から島のまとめ役に選んだあねご肌の快活なリーダー、ブリッド・イ・ドナーハでした。一行はパブの前の広場で白い毛糸玉を並べて島の女たちに呼びかけます。「この毛糸でダイヤモンドの編み柄を編んでここに持ってきてください」。隣島と同じく編み手のリクルートをこの島でも実施し、この島でも約30人の編み手を確保しました。アランセーターは夫や息子たちのために編むセーターでしたから、集まった編み手の多くは30－40代の既婚女性で、若い未婚の女性はモーリンただひとり。当時のアランでは年頃の女性はアメリカの白人家庭にメイドとして出稼ぎに行くことも多かったので、島に若い女性がいること自体が珍しかったようです。隣のイニシイアではあねご肌のブリッドをまとめ役に任命したパドレイグでしたが、このイニシマンでは最年少のモーリンをまとめ役に大抜擢したのでした。

「どうしてオショコンさんが私をまとめ役にしたのか、それは今でもはっきりとは分かりません。きっと両親を早く亡くし兄妹だけの貧しい暮らしをしていたのでそれ見かねたんじゃないかしら。実際、私たちはまとめ役の仕事をもらっていなかったらまともに暮らしてはいけなかったかもしれません。彼は私にとって父親代わりとも呼べる一生の恩人なんです」。パドレイグもまたモーリンを娘のように可愛がっていたようで、毎年夏に島にやってくるパドレイグとふたり並んで散歩している姿は島の誰もが記憶していました。

28歳で同じ島の魚籠（びく）職人マイケル・オ・ドゥンネルと結婚、一男三女を設け、家庭を守りな

がら、約40年の間、モーリンは島のまとめ役としてパドレイグのためにその責務を忠実に果たしたのでした。決して楽な仕事ではありませんでした。「自分よりもうんと年上の女性に向かって、きちんと編んで、早く編んでと言って回るのです。編みきれないほどの注文が来ても、約束の期日までにセーターをダブリンへ送らないといけません。3日で一枚のペースでひたすら編み続けなければならない時期もありました」。

まとめ役は、他の編み手のお手本となるようないいセーターを編まなければ示しがつきません。いつしかイニシマンのモーリンはアラン諸島一番の編み手として名を馳せるようになっていきます。誰かがその評判を聞きつけたのでしょう、１９８１年に教会から思いがけない依頼を受けます。「このたびローマ教皇、ヨハネ・パウロ二世がアイルランドを訪問され、ゴルウェイにいらっしゃる。そのときにアランセーターを献上することになったのでそのセーターをあなたに編んでもらいたい」。カトリックではローマ教皇はキリストの代理人、つまりこの世で限りなく神に近い存在です。これにまさる名誉はありません。モーリンの家の居間には献上セーターを微笑んで受け取っている教皇の写真が誇らしげに飾られています。「教皇からは『あなたのセーターをスキーに着て行ったけどたいへん暖かかった』というお手紙とロザリオを3つ返礼に頂戴しました。私の家の宝物です」。

私は１９９６年から合計４回モーリンの家を訪ねています。最後に会ったのは２０１３年でした。いつも大きめの椅子にちょこんと腰掛けて、話をしながらも前かがみに編み棒を動かしています。その手先の動きは目にも留まらぬスピード。ゆっくりと笑顔で話をしているのに、指先だけが別の生き物のように勝手に動いているという印象です。「何も急いで編んでいるわけではないのです。長いこと編んでいますが、このスピードが私の心を一番穏やかにするのです」。

特別な一枚

２００１年1月、本（「アランセーターの伝説」）の原稿も半分を越えたような頃でした、追加で確かめたいこと聞きたいことがいろいろ出てきたので私は3度目のアラン諸島行きを決めました。モーリンと会うのは5年ぶりで、なんだか遠くにいる母親に久しぶりに会いに行く息子のような心持ち。ひとしきり会話を楽しんだあと、意を決して一つの頼みをしたのです。前身頃、後身頃、左右の袖、首裾袖口のリブ、ここにすべて違う柄、しかもアシンメトリー（左右非対称）で。あなたの持てる技をすべて注ぎ込んだ特別な一枚を私のために編んではもらえないだろうか。「他ならぬあなたの頼みならば」というような返事だったような気がします。この感謝の気持を表すすべとして私には一つの手段しか思い当たりませんでした。財布から出したお金は、当時編み手に払う代金の数倍を超える金額でした。でもお金で感謝を示すことは失礼なことだと思われたらどうしよう、とビクビクしながら差し出すと、このときの言葉は今

上：モーリンのセーターを受け取るヨハネ・パウロ二世。／下：モーリンの家族。モーリンは娘たちにアランセーターを編む事を伝えた。

モーリンが編みかけていたアランセーター。

でもはっきりと覚えてます、「ミスター・ノザワ。あなたはジェントルマンね」。

３ヶ月後に小包が届きました。驚きました。30種類の異なる柄が見事に編み込まれています。前身頃のセンターにはモーリンの考案した麦の穂のような柄が誇らしく力強く編まれて、その右隣には精緻なブラックベリーステッチが優しいタッチで映えています。リブにも模様が入ってます。３６０度どこから見ても違う表情を見せてくれます。21世紀の始まりに相応しい「特別な一枚」です。アラン諸島の男の子が白いアランセーターを教会の堅信礼で着たように、私はこのセーターをクリスマスイブの教会の礼拝に毎年着ていくことにしています。

モーリンに編んでもらった「特別な一枚」。

モーリンの愛を多くの人に

２０２０年1月4日、モーリンは85歳で天に召されました。

私がアランセーターのすべてをまとめた本を書くぞ、という気持ちを強く持ったのは、心の父とも呼べるバドレイグ・オショコンの逝去がきっかけでした。バドレイグの功績を日本語で残しておくこと、それが私に託された彼の遺言のように思えたのです。彼の死後7年掛かってようやくその遺言は果たすことができました。さて、心の母、モーリンが亡くなったとき、私に課せられた使命はなんだろうか、と考えました。もちろんモーリンの人となりを伝えていくこともそうでしょう、しかしモーリンはニッターです。ならば彼女の編んだアランセーターそのものを広く世の中に伝えていくことはできないだろうか。モーリンという素晴らしいニッ

ターがいたという記憶を多くの人に残しておけるような。でも一体どうしたらそれができるのだろう。

そんなときに一人の男が静岡の私の店に訪ねてきます。アランセーターの話を聞かせて欲しい、と。米富繊維の大江健さんです。彼とは一度だけ数年前に東京の大きな合同展で会ったことがあり、そのときも山形で意欲的なニットの提案に取り組もうとしている様子を高く評価したことは覚えていましたが、それきりでその後に交友があったわけではありません。ですが、彼の方はその後も私の「アランセーターの伝説」を熟読し、いたく感動してくれたようでした。

何度かの面談や電話でのやり取りの後、彼が言います。「THISISASWEATER. の次の作品にアランセーターを考えてみたいんです。協力してくれませんか」。同時に具体的にいくつかの提案も出してきました。どれもいいアイデアでした。が、それを聞いた私の頭の中にむくむくと一つのアイデアが湧き上がってきたのです。

「モーリンに編んでもらった特別の一枚。毎年クリスマスに着るこのセーターをかつての私は自分の死装束にすることを考えていました。でもそれではゴッホのひまわりを私の棺に入れて一緒に燃やしてくれ、といったどこかの会社の社長と同じ愚行になってしまいます。今ゴッホの名画を美術館で多くの人々が鑑賞できるように、この特別な一枚も多くの人に着てもらうことができたらいいのに。たった今私にはそんな夢が浮かびました。このモーリンのセーターをマシンニットで複製できたら素晴らしいじゃないですか」。

やってみます、と引き受けた大江さんでしたが、正直言うと、このときまだ私は半信半疑でした。世界一の編み手による最高レベルのハンドニットがマシンニットにそうやすやすと再現できるはずがない、諦めてくるかもしれないなぁ、と。実際最初に出来上がったサンプルを見せてもらったときには、やっぱり無理なのかなぁ、と落胆もしました。さらに数ヶ月、幾度となく繰り返された試行錯誤の後、新しいサンプルが出来上がったというので、山形まで出掛けました。

いや、驚きました、詳しいことは企業秘密に属することでしょうから話せませんが、従来マ

シンニットでは再現不可能と言われていたいくつかの柄も見事に仕上がっているではないですか。工場の皆さんからもここに至るまでの苦労話をたくさん聞かせてもらいました。マシンニットもすごい、米富繊維さん、ありがとう。夢のような話をお願いしてよかった。セーター、っていいよね。ゴッホやモネの複製画を部屋に飾るように、モーリンの特別な一枚をひとりでも多くの人にシェアしてもらえたら幸せです。天国のモーリンも喜んでくれるでしょう。

モーリンの話はどれも示唆に富むものばかりでした。

最後にモーリン語録をお楽しみください。

「ただ漠然と枚数をたくさん編んだところで、いい編み手にはなれません。どうしたらもっといいセーターに仕上がるか、どうやったらもっと複雑な柄が編めるか、この柄とこの柄を組み合わせるにはどうしたらいいか、というように、いつも興味を持って編んでいるか、という

ことのほうがずっと大切なのです」。

「この柄やこの柄は私が考案した柄で、今でも多くの人が好んで編んでくれています。嬉しいです。この柄の名前ですか？特に名前なんてありません」。（２２０のアランステッチを紹介した編み物の本を開きながら）

「パターン（柄の組み合わせ）を一種類に決めて編む人が多いけれど、私はいろんな柄を楽しみたいのでその時その時でパターンを考えます。だから私の編むセーターには2枚と同じパターンはありません。さあどんな柄を入れて編もうかなって編み針を持つとパターンが天から降りてくるんです」。

「誰が世界一のニッターかなんて考えたことはないです。テクニックだったら私よりも優れたニッターもいるかもしれません。でもアランセーターを編むのに最も大事なのはテクニックではありません。いちばん大切なこと、それは心です。着てくれる人に喜んでもらいたいと願い、どれだけ心を込めて編んでいるか、という気持ちです。その心ということであれば、私は

誰よりも誇りを持っています」。

２００８年ＴＧ４で放映されたモーリンの特集番組の制作スタッフの中にアイルランド在住の日本人女性がいまして、彼女から私に１本のメールが入りました。「モーリンが『私、日本でも知られているんですよ』とあなたの本を真っ先に紹介しているので、それに日本語の朗読を付けたいのですが、著者の許可をいただけますか」という依頼です。もちろん二つ返事でＯＫです。番組では私の書いた本が朗読付きで大写しになっていました。そして私の本でもこの番組でも、最後はモーリンのこの言葉で結ばれています。

「このセーターは私が編んでいるのではありません。神様が私に編ませてくださっているのです。アランセーターは神様の贈り物なんです」。

（２０２１年９月17日・記）

野沢弥一郎（のざわやいちろう）
１９５７年生まれ。神奈川県藤沢市出身。慶應義塾大学卒。（株）ジャック野澤屋・代表取締役。静岡市にてメンズショップを営む。アランセーターを世界中に広めたパドレイグ・オショコン氏と１９８０年代に知り合い、日本でのエージェントを務めた。現在も「ジャックノザワヤ」においてアイルランド・アラン諸島などで編まれたハンドニットのアランセーターを取り扱っている。渡愛歴は20数回に及ぶ。著書に「アイルランド／アランセーターの伝説」（繊研新聞社・２００２年）がある。https://www.savilerowclub.com